里親支援の再検討

― 里親養育システムの構築の必要性 ―

○　和歌山ダルク　　氏名　菅　めぐみ（会員番号 6843）

キーワード：ソーシャルワーク・里親支援・社会的養護

１．研 究 目 的

(1)里親支援の焦点化

昨今わが国では、社会的養護の必要な子どもたちを、より家庭的な環境で養育するために、施設のケア単位の小規模化、里親やファミリーホームなどを推進している。とくに里親委託を推進するにあたって制度改革が実施されつつある。これに伴い里親支援に関する重要性が指摘され、従来里親支援は児童相談所が実施しているが、長い間支援が不足している（いわゆる丸投げ）ともいわれている。しかし、委託される子どもに障がいがあったり、重篤な虐待を受けたなど、里親の力だけで養育することが難しいケースが増えてきており、政策や研究が里親支援に関して焦点化している大きな理由の一つであると考えられる。

(2)　「里親支援」とはなにかを改めて考える意義

里親支援とは何であろうか。厚生労働省(2012)が発行した「里親及びファミリーホーム養育指針」[1] によると、里親支援の定義の記述はないが、里親は、関係機関との連携・協働が不可欠であり、また支援を受け、助言や連携を求める必要性があるとする。また庄司（2010）は、里親支援を、里親への支援ではなく、里親養育がうまくいくように子どもと里親を支援することであるという。[2] つまり、里親は子どもと同等の支援される対象でありながら、子どもを養育する支援者としての役割も期待されているということである。しかし現状は、多くの場合里親は、「支援されるべき存在」でありながら、とくに問題がなければ放置され、関係機関と連携・協働すべき「支援者」でありながら、児童相談所から子どもや実親の情報がほとんどなく、今後の見通しもわからぬまま委託される。したがって、実親の状況が不透明であれば実親の影は薄れ、児童相談所との信頼関係が成立していなければ支援をうけることも期待できず、目の前にいる子どもを里親だけで保護し育てなければならないと感じるのは、あたりまえのことであろう。すなわち、「支援を受けない」里親個人の問題ではなく、支援体制の問題である。里親と同様に子どもを養育する施設では、職員を組織の一員として捉え、組織が質の高いケアを実現するためのシステムとして起動するための実践内容が、結局職員ひとりひとりへの支援となっているのである。里親が施設職員と同様に公的責任で社会的養護を担う支援者であるとするならば、施設と同様に、里親が子どもを養育するためのシステムを構築する必要がある。つまり、「里親支援」は、里親が「受けなければならない」特別なものではなく、「里親による養育」という、子どもと実親を支援するシステムがより質の高いケアを実践するための実践内容であるととらえることとしたい。そこで、里親が子どもを養育するシステムを構築するための課題を整理することを目的とする。

２．研究の視点および方法

（1）視点１：里親のニーズはなにか。

里親がどんなことに困り、何を必要としているのかを先行研究（調査結果など）から明らかにする。

（2）視点２：里親養育がうまくいってる理由はなにか

多くの里親が、大きな問題もなく子どもを養育していると思われる。その理由を明らかにする。

（3）視点３：施設における子どもを養育するシステムはどのようなものか。

施設における養育システムをと里親養育を先行研究より明らかにする。

（4）視点 4：里親養育システムを効果的に運営していくためには、何が必要か。

視点１から視点３を検討した上で、「文献研究」「先行研究」を参考にして効果的な支援体制を考える。

３．倫理的配慮

本研究は文献研究であり、文献を参考・引用するにあたって、日本社会福祉学会研究倫理指針に従って研究を進めた。

４．研 究 結 果

本研究により、以下のことが認識された。

里親のニーズを分析した結果、里親の役割は里親によってことなることがわかった。現状では里親の役割は明らかにされておらず、里親や児童相談所の力量や考え方により大きく異なっている。里親のニーズは、「ただ話を聞いてほしい」から、具体的な問題の解決方法を教えてほしいなど、さまざまであるので、それに対する支援として里親支援施策が場当たり的な感が否めないが、里親委託率が大幅に増加した事例では、比較的役割分担がきちんと行われていたことがわかった。その一方で、児童相談所との関係がうまくいっていない里親は、児童相談所の決定に不満があるとしても、黙って従うことで問題を回避する場合もあることがわかった。

施設内では、システムがうまくいくためには、人との連携も大切であることがわかった。

5．考 察

里親や機関の役割が明らかにするために、里親による養育システムの構成要素を考察するにあたり、子どもと実親の生活の広がりを鑑みなければならない。なぜならシステムは、子どもや実親を支援するためのものであり、生活の広がりにアプローチする（ソーシャルワーク実践）からである。システム構築と、それを運用するための方法の両方を検討する必要があることがわかった。

1）厚生労働省(2012)「里親及びファミリーホーム養育指針」

2）庄司順一(2010)「里親支援の今後の展望」『世界の児童と母性』 No.69，資生堂社会福祉事業財団， 9-12